

「私のメディア史」制作からメディア・リテラシーを育てる授業

聖母被昇天学院中学校高等学校 岡本弘之

要旨 情報社会で生きる生徒達にとって、情報の受け手・発信者としてのメディア・リテラシーを育てることは必要である。本研究では「私のメディア史」制作の授業を通しメディア・リテラシーを育てる授業を企画・実践・考察し、高等学校情報科における授業実践を共有することを目的とする。

1. 研究の背景と目的

メディア・リテラシー教育は、もともと情報の受け手としてのリテラシー育成をはかることから始まったが、今日のソーシャルメディア時代においては、情報の発信者としてのリテラシーも必要となってきた。

これについて中橋はメディア・リテラシーを「メディアの意味と特性を理解した上で、受け手として情報を読み解き、送り手として情報を表現・発信するとともに、メディアのあり方を考え、行動していくことができる能力」と定義し、情報活用能力の育成を目指す情報教育との重なりが多いことを指摘している。

実際に高等学校情報科学習指導要領及び同解説にメディア・リテラシーという言葉の記述はないが、平成 25 年から始まった「社会と情報」の教科書では 6 社 8 冊中の 6 冊に記述があり、メディア・リテラシーは情報科の授業の中で取り扱うべき項目と考えられる。

情報社会で生きていく生徒達にとって、情報の受け手や発信者としてのメディアリテラシー育成は重要であり、情報科の授業においても教材等を工夫した授業実践事例の開発・共有は重要である。

2. 研究の方法

情報科の授業において、生徒に「私のメディア史」年表を制作させ、その考察・気づきの共有を通じて生徒のメディアリテラシーを育てる授業を企画・実践し、授業中の生徒の発表・ワークシートの記入内容から、その効果について考察する。

3. 授業の実践

勤務校（女子校）の高校 1 年生情報科「社会と情報」の授業 2 時間を用い、授業を実践した。

3.1 授業のねらい

この授業の目標は、自分や周りの人が小さい頃から多くのメディアに接し、自分たちの行動や考えに大きな影響を与えていることに気づき、メディアからの情報を鵜呑みにせず、クリティカルに

受け止めることの重要性を知ることとした。

3.2 授業の展開

3.2.1 私のメディア史年表制作（1 時間）

自分と接したメディア、そこから受けた影響について、大まかな年齢ごと（乳幼児期、小学校低学年など 5 区分）に区切った年表に記入していく。各時期 3 つ以上書くことをノルマとし、思い出す資料として年代ごとの流行語や流行歌が紹介されている Web サイトも参考にしながら作業を行った。黙々作業するのではなく、近くの友達と相談しながら、絵本・雑誌・TV・DVD・パソコン・ケータイなど、できるだけいろいろなメディアを書くよう指示を行った。

私のメディア史			
年代	どのメディアが (メディアの種類・作品名) (例) TV「おはねんこ〜しよ」	どう影響を受けたか・つきあってきたか (強印象、おぼろげな記憶、当時の流行など) (例) 3 におぼろげな記憶があった	他の人の例 (例) 私と同じ経験の人が多かった
乳幼児期			
小学校			

図 1「私のメディア史」ワークシート(部分)

3.2.2 私のメディア史からの考察（1 時間）

完成した「私のメディア史」をもとに、後半はグループワークを行い、お互いのメディア史を比較しながら自由に意見交換を行い、前半は年代ごとに、3 人の生徒に発表させた。授業者が同じことを書いた生徒がいるか挙手で確認したり、似たことを記入した生徒に発言を求めたりする中、生徒は他者の発表内容を年表の「他の人の発表」欄に記入する作業を行った。

小学高学年	TV「ワザワザ」TV「ワザワザ」 DS「モザイクコレクション」 DS「どろぼうの森」 携帯「少女時代」 マンガ「少女時代の仮面」 韓ドラ「チャンギム」 ケータイ「特撮」 TV「9696」	少女時代のダンスマシアを見た。 ガラスの仮面のまね。 どろぼうの森は毎日やってた。 「チャンギム」も 小6でケータイ買ったから。 ケータイ「連絡」メール
	TV「少女時代」	ミュージックステーションで少女時代が出る回を録画して何回も見た。

図 2 生徒が記入した「私のメディア史」

後半は自分のメディア史を分析的に見て、考察・感想を記入する。考察についてもグループワークで意見交換させたり、数人の生徒に発表させ、気づきによる学びを共有させ、最後に授業者が情報を鵜呑みにしないメディア・リテラシーの大切さを話しまとめた。

4. 授業の結果

4.1 「私のメディア史」の記入内容

生徒が記入した「私のメディア史」の各時期の大きな特徴をまとめると、以下ようになった。

表1 生徒のメディア史のまとめ

幼児期	TV (NHK 教育、アニメ) がほとんど →一緒に踊る、まね、グッズ集め
小学生 低学年	TV はアニメ中心、ゲーム機の購入 漫画雑誌の定期的購入開始
小学生 高学年	音楽への興味 (アイドル、K-POP) アイドル雑誌・ファッション雑誌購入 携帯電話の購入・パソコンの利用開始 →屋内での遊びが増える
中学生	TV はバラエティ・ドラマへ ネット利用 (見る)・スマホ購入 →動画サイト、有名人ブログ、LINE 利用 iPod・CD 購入→音楽への関心高まる
高校生	ネット利用 (発信へ) →Instagram、Twitter、Facebook

制作の過程を通じ、改めて自分たちが多くのメディアに接していることや自分の行動に影響を受けていることを実感していた。

4.2 生徒による分析と考察

制作した「私のメディア史」を自分で分析し、その気づきを意見交換させた。この結果をもとに考察と感想をワークシートに記述させた。

<考察>
表の内容からどのようなことに気づきますか？分析して考察を記入しましょう。

小学校の時までは、普通点が良かったので、中学校に入ると本を本の趣味が、は、3つ、普通点があったり、というように、成績が落ちた。そして、小学校の時、情報を得る手段は、小さい頃には、テレビで、大人は、雑誌、自分に対してのメディアの影響は、自分自身と、思いました。それは、新しい情報を、テレビで、知ることが、できる。

<感想>
これら作業の感想を書いてください。

自分の小さい頃には、この時代は、便利になり、色々なメディアから、色々な手段で、情報を得ることが、できる。自分が大人になると、色々な種類の情報が、入ってくる。これは、いいこと、だと思います。自分が大人になると、色々なことを、知ることが、できる。

図3 生徒の考察と感想の記述例

生徒が書いた考察を3つの観点で整理してみた。内容は生徒の主な記述である。

①年齢と共に変わるメディアの役割の変化

- ・同じTVというメディアであっても、アニメ→音楽→ドラマと得る情報が変化していった
- ・単に情報を受け取る立場から、年齢が進むにつれて、自分から情報をとりに行くようになった。
- ・メディアが情報を得る手段から、人とつながる手段へと変化した

②メディアの与える影響力について

- ・小さい頃はみんな同じような行動・遊び、それはみんな同じTVを見ているから
- ・メディアのまねをすることは根本的に変わっていない。小さい頃はキャラクターのまね、大きくなればファッションのまねなど

③メディアへの疑問・批判的思考

- ・小さい頃にみんな同じTVを見ていたのは、放映時間などメディアの戦略だった？
- ・子供向け番組の間のCMにキャラクターのおもちゃのCMが入るのも作戦か？

5. まとめと考察

授業の結果から本実践の効果を考察する。

前半の「私のメディア史」制作を通し、自分たちのメディアとの関わりを振り返った。その中で気づきから「多くのメディアと関わり情報を得てきたこと」や「メディアから影響を受けてきたこと」を実感し、後半それを分析的に考察する中で、自分にとってのメディアの果たす役割の変化や、情報の発信者としてのメディアの戦略に気づくことができた。最後の授業者の振り返りで話した「情報を鵜呑みにせず、クリティカルに受け止めることの重要性」についても、制作時の気づきから実感を持って学ぶことができる結果となった。

今日の情報社会を生きる生徒達にとって、情報の受け手・送り手としてのメディア・リテラシーは重要であり、高校の情報科でもこれを育てる授業実践事例の蓄積は重要である。今後も生徒のメディア・リテラシーを育てる授業を開発し実践していきたい。最後に本実践で使用したワークシート・スライドは下記Webで公開している。

(「情報科の授業アイデア」<http://www.okamon.jp>)

参考文献

- (1)中橋雄(2014)「メディア・リテラシー論」北樹出版
- (2)岡本弘之・浅井和行(2014)「メディア・リテラシーを育てる情報科の授業」日本教育メディア学会第21回大会発表論文集,pp.160-161
- (3)岡本弘之・浅井和行(2015)「私のメディア史制作からメディア・リテラシーを育てる授業」日本教育メディア学会第22回大会発表論文集,pp.90-91